

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號六第 卷三十第

行發日一月二十年十正大

論叢

我所得稅と普遍の原則

法學博士 小川郷太郎

植民政策是非

文學博士 原勝郎

朝鮮の三開港場

文學博士 三浦周行

進歩か退歩か

法學博士 財部靜治

農業勞働問題

法學博士 河田嗣郎

時論

米國の排日問題

法學博士 末廣重雄

財産稅案に対する諸種の非難に答ふ

法學博士 神戸正雄

說苑

リッケルトの價值體系

文學博士 米田庄太郎

雜錄

マルクス主義に所謂過渡期

法學博士 河上肇

伯林最近の生活費

法學士 汐見三郎

附錄

本誌第十三卷總目錄

進歩か退歩か (三、完)

財部 靜治

一

歴史の研究は、恒常不斷の一直線をなして、進むべき進歩を示さず、古希臘羅馬文明か北方の蠻人により毀たれて後、殆んど一切の地域に於て、政治的、智能的及經濟的進歩は、八世紀に亘り杜絶されたり、音樂と建築術とを度外視せんか、殆んど無主義に送られたる中世期は、二進歩期に挿まれたる、國家荒廢 Interregnum に外ならざりき、古代に則れる文物復興期に至りて初めて、人間活躍の新効果を奏するの基礎は、右尙古主義のために置かれたり、その後、雖も亦發展は、通有的に非ず、直線的にも非りき、Theodor Lindner かの著歴史哲學中、適切に注意せる如く、劃一的なる人間界は、歴史的には決して存せず、世界の四分の三は、初めより西洋とのあらゆる接觸を、絶たれたるを以て、進歩も亦劃一を缺くの外なく、發展は通有的ることなかりき、各開化圏内に於ても、亦間々逆行的運行を挿めるを以て、發展は直線的たることなかりき、民主制の進歩は、拿破崙翁沒落の後、半世紀だけ引戻されたり、今日にありても尙人間の外面的自由、特に又内面的自由の包容程度は、一切の諸國に於て、一七八九年の標準に、達せざ

ること遠慮なり、進めるものと雖も精々、一八一三年の狀況に達し得たるのみ、奈破崙翁の帝權没落の後、西班牙には異端糾問再び始められたり、國民的にも亦長年月臥薪嘗膽の、隱忍期は送られたり、奈破崙翁の世界帝國は、元來固有の國民的基礎を有せずして、寧ろ王統的國際的基礎を有せるに拘はらず、殆んど一切の中歐、南歐、北歐諸國民か、一部は意識的に、他の一部は無意識的に、奈破崙翁により通して刺戟せられ、國民的意識を深からしめたるは、恰も右の時代にあり、一八一五年にその局を結ひたる維也納會議は、實は聯合四大國の意志及利害に左右せられ獨逸、伊太利、波蘭、諾威、愛蘭及白耳義の諸國民は、等しく、之か犠牲に供せられたり。

一一二

人道上最も光輝に富める行動と雖も、決して進歩のみを意味することなし、北米に於て奴隸制は廢せられたりと雖も、黒人が虐待及輕蔑に、曝さるゝの事實は依然たり、南北戰爭以前にありては、黒人は人身的にその主人に隸屬せるも、大體によく遇せられたり、然るに今や彼等は自由人たるも、白人により私刑に處せらるゝは、被追放者と異なるなし。

一一三

萬國協和の觀念は、現在かゝる觀念として、従前の如何なる時よりも、高潮に達したり、公民的平和論者、社會主義無政府主義の非軍國論者は、第十九世紀か國民主義者の世紀たりしか如く

第二、二十世紀は萬國主義の世紀たるへしと、するの豫想に於て一致し、輓近人の萬國的大志を、今日掃蕩せんと欲するも、諸機械を破棄し、發電機及汽罐車を世界より一掃し、印刷術を廢し、學校を鎖さし、學者を實驗室に閉ち込むるの方法に、出てさる限り、之を望み得へきに非すとなす而して軍事的意義の平和觀念、詳言すれば長かれ短かれ、一時に限らるへき無戰爭狀態と、新平和主義 Pazifismus の意義によれる平和、詳言すれば國際間の爭議を、穩便に落着せしむへき諸方便の、發達を伴ひ又組織つけられたる、諸國の共存和親とを、判然區別せんとする者をも生じたり、事實上由來決して今日の如く、公然にして又世話好きなる、諸萬國會議及萬國機關 (Verträge, Institute, Aemter 等の名を附せる) か夥しきことなかりき、郵便より動物愛護に及び、勞働者保護立法より、酒精の研究に至る迄、凡て萬國的商量及規律の範圍に入れり、萬國的感、情、激、發、の、自、然、的、源、泉、たる、勞働者騒ぎにありては、戰爭前社會民主黨は三年毎に、多日に亘る萬國會議を開き、その會議には世界僻遠の諸地方より、仲間は議事のために集まり、又各種の勞働者、假令は煉瓦工印刷工、坑夫等は、萬國聯合に屬し、萬國書記局に從屬するの趣ありき。されど今若しその形式を度外視し、形式の内容に立入りて精察するに、前記せる所に正反せる一傾向を、勞せずして知覺し得へし、素より輓近無資產者の萬國主義は、疑もなく外延に於て増大せり、されどこの増大は内容の周密と感情の深さを、犠牲として遂げられたり、Marx 及 Bakunin の古萬國主義を

* Cf. Alfred H. Fried, Handbuch der Friedensbewegung. 2. Aufl. '11, 1. S. 10; Kurze Aufklärungen über Wesen und Ziel des Pazifismus. Berlin, Verlag der „Friedenswarte“, '14.

奉したる諸新聞と、現時の社會主義的諸政黨の、新聞とを比較せんか、階級意識ある勞働者の範圍に、萬國的觀念全く失せたるを、立定するに足れり、祖國は資本家本位主義の國家たり、剩へその國家により、他の諸國民より裂き取られたる、雜種の地域は、之に併合せらるゝに拘はらず萬國主義的無資産者の代表者か、公然にして而も憤激せる賛成により、最後の一滴に至る迄、その祖國を防かんと欲することを、宣言せるは歐洲のあらゆる議會に現はれたる事實なり、黃白黒を問はず、あらゆる顔色を帶へる、賃銀の奴隷間に、社會主義的同胞關係ありとするか如きは五月祭に於ける有能辯士の、論旨に引下けられたり。而して右の事情あるは一様なる基本源泉に二傾向あることに歸因せしむへし、即ち右基本源泉たる資本家本位主義は、市場及資本放下を、謂は、國際化せりとすへきものあるか、その結果として一面諸種の勞働者は、相互の經驗及希望を交換するため、又事情によりては計畫することあるへき、共同行爲を議するため、出来るだけ頻繁なる接觸を、保つの要に迫らるゝも、他の一面に於て各國の國民的勞働階級民は、國民的工業及その自然的保護者たる、國家の一喜一憂により、左右せらるゝの關係を深からしめたり、又同じ資本家本位主義は、無資産者大移住の原因となれる所なるか、その移民の出發國は、常に經濟上貧弱なる國(伊太利、スラウ民族の國)なるも、その目指す所は、經濟事情一層佳良なる諸國(米、獨、佛)に存し、かくて各無資産者間に、一種の競争を惹起し、引いて又外國人に對しては、同一階級の

仲間なから、之をして國民的偏見及嫌惡に、耽らしむべき一切の事柄を、その心中に覺醒せしむることゝなれり、かくて二重の現象は呈露せらる、即ち一面萬國主義の外的結束は、觀念上日々強大又夥多となり、かくて國際的觀點よりせば一得を、國民主義的觀點よりせば、一失を意味するも、萬國的感情の結束は、日に益々薄らき行き、かくて又國民主義者は之を進歩と觀し、萬國主義者は之を退歩と觀す。

一四

交通の技術的設備、迅速又確實を増せるを以て、諸國民が漸次精神的に接近し、同胞感念を普及せしむるの、一保證視せんとするの希望も、亦今日は裏切られたりとすべきものあり、世界大戰の影響を問はさるも尙、近年恰も國民的激昂上、大に緊張し、この激昂に動的威力あるは、假令は伊太利人の如く、從來極めて冷靜にして、國民的事項につきても、事件的に考ふべき國民さへ、その激昂に驅られたるの事實によ、之を窺知し得べきは、不偏なる觀察者として、何等疑ひ得ざる所なり、諸國民間に於ける人間連帶感念は、所在轉換及び交互相識の、容易又便利を増せるに従ひ決して増大せることなきの事實を、何人が拒み得べき、寧ろ今日既に主張し得へし、距離を短縮し、又は全く之を駕御せる諸方便と、各國々民的統合の念頭そのものゝ中に、今尙存在せる障壁を、斷絶せんとする諸試みとの間、非常なる不釣合存すと、而してその初めの事業は、

後者に比し遙かに容易なることを實證したり、輓近の人は巴里伯林間を十七時間にて、又維也納羅馬間を三十三時間にて旅行するも、尙七十年前にはかゝる旅程のために、十二日又二十一日を要したり、されど巴里及伯林間、維也納及羅馬間の精神的對抗は、之かために薄らけることなかりき、技術はあらゆる自然的境界を、輕快談笑の間に、踰越し得るか如くなせるも、國民的對立により、國民の心裡に描かれたる境界は、元の儘沈滞不變を續けたり。

一五

著大なる思想の一として、平和思想を數ふべきや、欺くへくもあらず、平和は一の實際進歩を意味す、人心に備はれる、野獸的本能としての奪掠心、破毀及殺戮の本能に對し制御者たるの特質は、文明中に宿さるゝ所なるか、平和には文明に宿さるゝ、この特質を振張するの方面上、一前進を伴へはなり、平和は貴重なる人命の節約を意味し、爭ある場合、國民的正義の裁判につきては惡判官とすへき所謂威力の最高權利を、行使することの斷念を意味す、平和はその外又普通兵役義務に固有なる状態として、數十萬の人を驅り、その人々にとりては無知無頓着なるへき事柄、否彼等の意に反し、その道德的經濟的利益を害すへき事柄のため、又或は彼等により冒されざる責務を果すため、その生命と他國に住めるその同胞の生命とを、賭することを強要するか如き、事情は止めらるゝに至る、且又平和は既にそのものとして、無限大なる一善事たり、従ひて之を達

するは、一進歩を意味すとすへきも、他の觀點よりせば、平和も亦進歩に對する一障礙、而も亦倫理的進歩の一障礙を意味す。

希臘の古哲學者 Heracitus か、世界は永遠に流れ行き、その間戦争はあらゆる事物の父なりとせるの一事によりても察し得へきか如く、戦争に對する評論は、古今時勢の變により、之を異にすへしと觀し得へき餘地あり、而も亦墨子の如き、人を殺すを不仁不義となすの論旨を推し、今至大爲レ攻レ國、則弗レ知レ非、從而譽レ之、謂三之義、此可レ謂レ知下義與三不義二之別上乎（非攻上篇）と反問し、夙に古代に非戦争論を唱へたり、今日の平和論果して全幅の眞理を、穿てりとすへき乎、否、戦争は無智の行爲とすへきも、不道德にあらず、少くとも一概に不道德なりとすへきにあらず、戦争は不義とすへきことあるへし、されど戦争そのものとして然るに非ず、寧ろ正義の使命を果たすこともあるへし、されば戦争に對し、倫理的判斷下され得へきは、世に義軍詳言すれば、正義の事柄に資すへき戦争存せず、由來存在せることなく、又存在し得ること全くなき旨、實證し得たるときに限られん、同様に平和觀念もそのものとして、徳不徳の觀念より引離さる、こは一王昭君の降嫁により、估ひ得たる平和を以て、正義と評し兼ねへきことを以て、察するも明かなり、平和か道德觀念により貫かれ、道德の基礎に立脚せる際に、初めてその價值を收む、萬國的正義なき一平和は、一の道德的危険なり、蓋し正道を貫くの、必要ありとするの感念は群衆

間に銷磨さるべきを以てなり。

假りに平和論者の意志が事實となり、神聖なる一般平和決議に基づき、條約的に犯すべからざる、諸國民生活の原道となれりとするも、それは萬國が現在領有せるものを、交互に承認し保證することを、土臺としてのみ起り得へし、即ちその永久平和 Pax Aeterna は、現狀の建増しとして然り、かくて又諸國民の自然的進歩及自然的發展にとりては、悲しむべき一狀況惹起されん、講和條約は歴史を通して、犯されたる國民的土俗的非道全部の、是認を意味し、現狀維持 *Immobilism* と進歩とを混同し、あらゆる満足の達成と、生得のあらゆる國民的抱負とを斥け、かくて平和論者かその觀念を貫徹し、各政府の外交を、決定的たらしめし史的瞬間に於て、世界を統御せる、諸國民及諸國の統治權が、永遠に亘りて確立さるゝこととなるへし、従ひてその他人種、言語又は意志により、その國に所屬すべき國民分子に、その境を擴け及ぼすの域に、今尙達せざる諸國、或は一國家を新設又は再興し得べきも、逆の諸事情により、今尙その希望を實現し得ざる諸國民は、かくてその最も神聖視さるべき權利、即ち自決權を欺かるへし、平和は百の國民を犠牲とし、百の問題を未解決の儘たらしむへし、偶然は正道に先んし、不正は正道となるへし、従ひて平和に威嚴ある進歩の、一現象たる印象を與ふるためには、現存せる諸國の相互保證を求め、又義務的仲裁裁判所を設立し、確立されたる權利 *iure condito* に關する爭議として、諸國間

に惹起さるゝものを、胚子の中に杜塞することを必要とせずして、之かためには寧ろ軍備制限の試みに當るを必要とす、平和を倫理的基礎の上におくためには、確立さるべき權利 *jus condendum* ありとの假定は、その前提條件たり、この權利は國民的純一性の、保持に着眼すべく、そは實際にありては普通國民決議權の、結果として現はるゝの要あり、而してその決議權は極めて眞面目なる意志により、企畫遂行せられ、又初めより直接間接に、その結果を假冒せしむべきものを、悉く除外するか如き、強力の保護施設により案内せしめ、國民的に疑義あり、又争はれ來れる一切の地域に之を適用し、その地域住民の合衆的性向及偏愛に、自由發動を許すの要あり、各國現政府の勢力に左右されざる、國民自決の一系列を、土臺とすべきかゝる手術は、素より現存せる幾多の國家構造に、死活の危害を加ふべく、實にこの方策により、その形を變へざる國家は、殆んどなかるへし、蓋し一國民の限定と合致し、かくてその國に名稱及精神を與ふべき國民以外に、多少複雑性なる他人種を、包容せざる國は一つもなく、その公民中に一人の故國語固守黨 *Irredenta* をも、宿さるものなければなり、されはこゝに説くか如き、政治地圖の改正を實現するは、事實上不可能なるべきも、かゝる改正ながら、永久平和は國民的壓迫制御の一道具に外ならざらん。

その外正義の原則、之と共に又諸國民相互の不羈獨立に基づき、立てられたる萬國協調の意義

によれる土俗的進歩は、地球上に住める一切の種族そのもの、心理に潜在せる一障礙のために遮止せらる、即ち各國民はその歴史上、有意又は無意識に神秘なる侵犯の法則 Gesetz der Transgression 詳言すれば、土俗的に又民意により、その國民に付せられたる境界を、踰越せんとするの法則を追隨す、各國は諸外國民を、統御せんと努む、國境外にあり外國壓制の下に、困しめる同胞を救ひ出さんかために、起されたる各獨立戰爭 Befreiungskrieg は、その軍役の經過好運なる限り、土俗上言語上征服されたる敵に所屬すべき、地區の併合に終る、桂の冠を以て飾られたる各軍隊は、國民的征歴の一道具に變更せらる、輓近の歴史は之か典型的事例に充てり、國民的膨脹の欲求あるかために、論理及倫理のあらゆる羈束は、破らるゝに至る、弱くして獨立を奪はれたる國民のみ、正しくして又萬國の博愛を夢むるか通例なり、強國民又は強大となれる弱國民は、その性質上不良の隣人にして、又苛酷なる主人たり、かゝる國民によりなざるゝ進歩は、殆んど常にその隣國民を、犠牲として遂げらる、實にその國民的繁榮及祖國の名譽は、よし必ずしも軍事的たらずとするも、尙常に經濟上外交上、その他の諸國に打撃を與へしことを、觀念するなくんは、未だ曾て考へ得へきことたらずと、すべきものあるに庶幾し。

一六

要するに進歩を決定するの、第一條件は解析にあり、進歩につき之を構成する實質を、分解す

るは缺くへからざる行動なり、而して曖昧なく決定さるべき唯一の進歩は、技術の進歩にあり、その進歩は實に未曾有なりき、素より大汽船タイタニックの遭難によりても示さるゝ如く、如何なる技術の奇蹟も、自然の威力逆らうに對し、抵抗するに足るだけ奇蹟的たることなし、自然はその基本大元に於ては、打勝ち難きものあり、されど百年前の生産及運轉力の技術と、今日のものとを比較せんか、何人も此範圍に於て、一大進歩あることを、最早疑ひ得ざるへし。

國民經濟に於ける進歩は、二部分に分解さるゝの要あり、即ち固有の經濟的部分、換言すれば貨物作出に向けられたる部分と、社會的換言すれば、寧ろ人に着眼すべく、貨物分配に向けらるべき部分とは然り、右兩部分は必ずしも符合せず、寧ろ屢反撥衝突す、經濟的退歩に伴ふ、社會的進歩起り得べく、又社會的禍害を醸すへき、經濟的進歩起り得へし、就中後の論旨は、歴史上の典型的一例により確證せらる、工業經濟經營上技術的新道具としての機械が採用されたるは虞らくは、工業の歴史上最も傑出せる出來事たり、否 Marx も事の序に之を眞の革命と呼へり、この改新の結果は、全生産上測り難き技術進歩を遂げしめたり、その手續は簡易となり、その迅速を増し、商品の分量は數の上にて數百倍となれり、之かために力及人の勞働に、著しき節約を遂げたり、されど社會上よりせんか、貨物作出に於けるこの測るへからざる進歩は、諸種の苛酷及殘忍の時代により贖はれたり、機械の發現に伴へる、當初の隨伴現象は有名なり、手工業の戰慄すへき没

落、劇しき背鄙増大し行く都市労働者群失業の普及、死亡數及賣淫の増加は然り、そは俗衆爲貧 Verelendung 學說起り、否起るの要ありし時代たりき、その學說たる後世にありては、K. Marx に出つとせらるゝ所なるも、そは何れの學派に屬せるかを問はず、前世紀前半中に於ける、殆んどあらゆる經濟學者の共有物たりき、即ちその時代に於て經濟上最も進歩せる國、即ち英蘭に起れる諸事情を、目撃せる人々は、用機經營の奇蹟か、最も迅速に遂げられ、かくて賞讃せられたる國に於て、驚愕に打たれその國に背るを向けしむるか如き、恐るへき諸事情を發見したり、佛の大經濟學者 Simonde de Sismondi は、英蘭研究旅行の後、その當初の英國經濟學說尊信より改宗するに至れり、即ち氏は前には完全なる營業自由、及無羈束なる競争の、熱心なる一主張者たりしも、爾來慘憺たる進歩に對する唯一の救濟策を、國家による労働後見、即ち後世の所謂國家社會主義に求めたり、Léon Rollin は更に一步を進め著しく賞讃されたる英國社會事情に對し最も急劇にして又最も避け難き、廢顔ありと宣言したり Fourier は又所謂時勢遅れの諸國々民の生存は、所謂先進國に於けるよりも、佳良なりとの苦言を纒陳し、勞意に富める佛國、英國及カタロニエンの労働者は、仕事を搜しても屢徒勞に歸するに反し、西班牙人は仕事に就かんとするの意ある限り、何物かを發見すへしとせり、この論旨は資本家本位主義の少年期全般を通し、殆んど争ひ難き效力を有したり、かくて又米國か生みし經濟學者中、獨創力に最も富めるものゝ一人

すすへる H. George も、現進歩に必然貧困を伴ふべしと觀し、「富の分配不正又不平等に基づく諸弊は、輒近文明進歩するに従ひ、益々鮮明となれるか、そは進歩の附隨事件たらずして、その進歩に停止を惹起さしむるの必要ある諸傾向なり」「是等諸弊は自然法により、強ひらるゝに非ず、一に自然法を無視せる、社會的不整頓に由來す」と論したり*。而も亦次いて技術的新利器により、日常生活の幾多使用品を幾層倍たらしめ、又低廉ならしめ、又工業界の堅實なる國民的競争と、あらゆる保護方策の試みありしに拘はらず、入り來れる萬國競争との影響により、物價を低落せしめしと共に、一面新半邪神の放恣により、悲酸の境遇に投げ込まれたる、無資産者かその境遇に逆らひ、階級連帶の思想に基づき、目醒めたる獨立の組織的抵抗を興すに至り、進歩の二元觀は漸次弱めらるゝに至れり、かくて今日に於ては大工業主義かその根を最も深く下ろせる所、恰も勞働階級民の生活事情も、最も基本的に高まれりと謂ひ得へし、唯此規則には依然として例外なきに非ず、即ち依然として資本家本位の生産の、女王たる倫敦は、今尙比例數の基礎により比較するも、亦資本家本位主義今尙その侵入を見ざる、バルカンの小貧弱都市に於けるよりも、遙かに無資産の無頼漢に富めり。

經濟進歩の實在につきては、未來に決定さるへし。

之を戦前の獨逸につきて見るに、經濟發達の向上線は、大工業主義により惹起され、大工業の

* Cf. H. George, Progress and Poverty. 4. ed. 80. p. 489.

驚くべき興隆は、諸隣國を心配せしめ、世界商業の古獨占者たる英人を、競争者の目録中に引下ろしたり、されど獨逸大工業の總統は、右の如く現はれ初めしと共に、その副署として嚮都市民化、部分的には又田園荒廢（即ち田舎の人手拂底）の現象あり、その外そは瑕疵ある根據に立脚せり即ち工業品の輸出、農産物の輸入に立脚せるは然り、後者は國土をして益々外に寄頼せしめ、かくて關稅戰爭及軍事的破裂の際、國を危からしむることあるへし、前者は現今獨逸の輸出品を、仕入るゝ諸國民か、師たる獨逸の教を理解し、その輸入品を模倣し、又その品質も之に達し初むべき瞬間に至ては、成立ち得ることゝならん、追ひ付かれ打勝たるゝは、商品輸出により立國せる、諸國一切の運命なり、此外その國にとり最も大事なる諸貨物を、その國に産出せる工業品との交易により、調達し居れる際、かゝる運命はその國にとり、恐慌及滅落を意味す、(Michelsは此題目に關する、悲觀的說明の一例を) Karl Oldenberg, Deutschland als Industriestaat, 97. S. 39. 13. 本學カ、G. Sch-moller, Die Zukunft der Deutschen B. völkering und die heutigen Wanderungen übers Meer, Woche 1. Nr. 39. 之を讀成せることを附説せり。而して右の論旨が、世界戰爭中に示されたる獨逸の持久力、並に最後の敗戦に、如何なる關係あるかは、之を後日の研究に譲るゝかくて晩近の歴史に示さるゝ、秀絶又至大の經濟發展は、地獄の一管絃樂への序樂に外ならずとの、假説を立つるの餘地なしとせず、かゝる場合進歩は虚妄又一時的たるへくそは一の鬼火か、旅行者に強き快樂を與へ得べきも、之を没落に案内するに喩ゆへし。

進歩の表裏反覆なることは、政黨の實例によりても亦明かなり、特に一政黨が理想的根據に立

脚し、社會革新の目的を遂げんとするときは然り、即ち諸政黨か金錢上富裕となり、その懷ろを満たし、黨員を増し、選舉の勝利を祝ひ、畧言すれば進歩に進歩を累ぬとするも、同時にその政黨は、自黨を以て益々自存目的と考ふべき、一獨立首領者の勢力増長を示すに反し、その本來の相貌は失はれ、その政黨設立に際して達せんとしたる、目的には遠ざかり、所謂政權爭奪のため催眠的となり、その組織は雄大なるに拘はらず、その力及構造の大きに於て、到底匹敵し難き國家に對し、猛烈なる群衆行動を採るの、滋味及力なくして、無力の状態に陥り、かくて既に達し得たる進歩も、再び疑問とせらるゝに至る(Michelsの著書中、同じ論旨を詳論せるものに Zur Soziologie des Parteiwesens in der modernen Demokratie, II 文明協會譯政黨社會學あり、譯書には著者の小傳を載す) 要するに政黨につき一面には、容易に測り得べき實際進歩あるも、他の一面計算的には測り得ずとも、同様容易に知覺し得べき退歩あり。

進歩は又一弊害の結果たること起り得へし、假令は勝ち戦の如き、合衆的暴力行爲の成功は、勝利者側に於てその大望を、暴力行動そのものに遠かる他の範圍にも、亦及ぼすの傾向常に之に伴ふ、その結果としてその成功には、進歩への強き衝動を宿すも、歴史の證する所によるに、この種の發展には、國民生活に於ける道德的能力の、大疲弊を伴はざること替てなし、その美的因子にも亦屢大損害を加ふ、奈破崙翁三世による勝ち戦の長系列には、佛國商業交通、勞働者保護及建築の、一隆昌を伴へるも、之と共に又生存上輕浮心は跳梁し、美術皮相化するの結果を伴

へり、一八七〇年以後軍事上に勝ち誇りたる獨逸は、その技術、産業上經濟上未曾有の勃興を示せるも、その藝術文學略言すればその美的趣味は、之に反して三十年間不長となり、否墮落に歸し、同時に獨逸國民の心理も、亦その開化上最も重んずべく、又最も好まじき特質の一部を失ひ一面有用なるも倫理的に無頓着たり、賞揚の價値に乏しき他の特質を得たるものゝ如し、唯この種の評論は、異論を挿み得へき餘地多きを以て、立入りたる斷定は避くへきも、右論旨の如き評論も尠からざるは注意すへし。

經濟的大進歩の時代は、通常公共道徳の上に、大に相違せる二影響を及ぼすへし、一面には幾多階級鬭争を経たる後、始めて然りと云へ、貧困なる下層階級民にも亦及ぼさるへき、生存條件の改善により、彼等をして一般福祉にも均霑せしむることゝなり、法律上規定せらるゝ程度の徳行は高めらるへし、即ち統計に示し得へき犯罪は減し、減せざる程度に於ては、その犯罪巧妙となり、殺人の代りに巧みなる詐欺行はる。されど他の一面に經濟的繁榮期は、物持階級及政府の自意識を麗大ならしめ、その自意識は對外關係上、偏狹なる愛國主義の形式、并に博愛心の一般低下となりて現はる、他國語を話し、他人種なる諸國民に、對する程度に於て然り。

一七

諸國民の政治的精神的藝術的歴史は、小進歩及小退歩の、殆んど際涯なき繼起よりなり、その間何等の調和及方法なし、Vico か歴史の干満 *Corsi e ricorsi* と呼へる、氣任せの傾向以外、何等の規律なくして續出す、進歩の基本性質は、その不完全にあり、その跳躍的斷片的にして、異

議多き本質にあり、進歩は決して同時に人間活動の、あらゆる部面を包括することなし、その效力は一方向には佳良なるも、他の方向へは不良なり、時として分量價值作上の進歩は、品質價值作上の損害を伴ひ。又はその反對なることあり、一範圍に於ける進歩か、他の範圍に於ける退歩を、恰もその條件とすることあり、人間史上その永遠なる右往又左往、一上一下に於ける出來事は、相互の間比較し得へきに非ず、その結果も亦確かめ難し、進歩に旋律あることも、未だ曾て立證し得へきに非ず、多くとも多少の伴生及定期回歸性を、究明し得へきのみ、かくて學問上にありては、進歩概念により何事をも着手し得へきに非ず、唯この不明又海綿質なる概念も、俗語に移され、新聞に推し込まれ、國民の口の上せらるゝは、大なる淺慮及概念錯亂を生むの原因なり、されは少くとも定冠詞を附し、又絶對觀念としての進歩 *Der Fortschritt* といふ語は、學者の専門語より斥そけ、之か使用を許せりとするも 精々定義し得へく、限定し得へき範圍内にて、同様に定義し得へく、限定し得へき進歩に限ることゝすへきなり、人間の進歩は、「神を父とし、人を兄弟とす」へきことを、その目標とすへしとは、信仰の基礎に於てのみ、説き得へき所なり。進歩てふ語も、高調子には響きながら、空虚又は意義過飽なる、一切の言葉同様、科學上之を有用たらしむるためには、相對主義の流れ内にて、之を採用するの要あり、何に於ける進歩か、如何なる見地より見たる進歩か、如何なる前提の下に於ける進歩かと、言ふか如き反省に就き、相當の解答を得たる際に限り、社會學者としては之を採用し得へきのみ。(完)